

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 機能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効果効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)			
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	塩酸塩なしジフェンヒドラミンはあり →レスタミンコーワ軟膏	アレルゲンを塗布または皮内注射したときに起こる発赤、膨疹、そう痒などのアレルギー性皮膚反応は、本剤の1回塗布により著明に抑制される。									炎症症状が強い渗出性の皮膚炎：適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。	・眼のまわりに使用しない。	通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ
	ジフェンヒドラミン	レスタミンコーワ軟膏	アレルゲンを塗布または皮内注射したときに起こる発赤、膨疹、そう痒などのアレルギー性皮膚反応は、本剤の1回塗布により著明に抑制される。									炎症症状が強い渗出性の皮膚炎：適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。	・眼のまわりに使用しない。	通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ
	マレイン酸クロルフェニラミン	外用の添付文書なし													
鎮痒成分	クロタミトン	オイラックス	本剤は抗ヒスタミン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚のうちそう痒感を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えないことから、抗ヒスタミン剤、局所麻酔剤とは作用機序を異にすると考えられる。一般には、皮膚に軽いしゃく熱感を与え、温覚に対するこの刺激が総合的にそう痒感を消失させるといわれている。			0.1~5%未満(熱感・しゃく熱感、刺激症状(ピリピリ感、ひりひり感等)、発赤、発赤増強、紅斑増悪、分泌物増加、浸潤傾向)	5%以上(過敏症)	本剤に対して過敏症の既往歴	・高齢者・妊婦又は妊婦の可能性のある婦人への大量又は長期にわたる広範囲の使用、乳幼児・小児に対する広範囲の使用	炎症症状が強い渗出性の皮膚炎：適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。	・眼あるいは眼周囲及び粘膜には使用しない。 ・塗布直後、軽い熱感を生じることがあるが、通常短時間のうちに消失する。	高齢者、妊婦又は妊婦している可能性のある婦人には、大量・長期にわたる広範囲の作用は避ける	通常、症状により適量を1日数回患部に塗布又は塗擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊婦の可能性のある婦人：大量かつ広範囲の使用は避ける。	湿疹、蕁麻疹、神経皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化					
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ						
殺菌成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/v%チアミトール水						頻度不明(過敏症)		粘膜炎、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと				原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。 ・炎症または器刺激性の部位(粘膜炎、陰股部等)への使用。正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。 ・深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、脚製後滅菌処理すること。 ・経口投与しないこと。洗眼には使用しないこと。 ・密封包装、ギブス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。	粘膜炎、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと(全身吸収による筋脱力がある)。		効能・効果:用法・用量(塩化ベンザルコニウム濃度) ①手指・皮膚の消毒:通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、その後、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で拭拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。 ④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。 ⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または磁密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。 ⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・拭拭するか、または噴霧する。 ⑦腫瘍洗浄:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。 ⑧結膜囊の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。 ・炎症または器刺激性の部位(粘膜炎、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より					
かゆみ・虫さされ用薬																						
抗ヒスタミン成分	塩酸イソペンジル	アンダントールゼリー ゼリー状軟膏					0.1%~5%未満(しみる、ひりひり感・ひりひり感・疼痛等の刺激感) 0.1%未満(熱感、灼熱感)	0.1%~5%未満(過敏症)											炎症症状が強い渗出性の皮膚炎の場合には、適切な外用剤の使用によりその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用		通常、症状により適量を1日数回患部に塗布する。	皮膚そう痒症、じんま疹、蕁麻疹、小児ストロフルス、虫さされ、痒疹、神経皮膚炎、湿疹、多形渗出性紅斑、凍瘡、薬疹・日焼けに伴うそう痒
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	塩酸塩なしジフェンヒドラミンはあり レスタミンコーワ軟膏						頻度不明(過敏症)											炎症症状が強い渗出性の皮膚炎、適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	尋麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量によ り適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康障 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの								
	ジフェンヒドラ ミン	レスタミン コーワ軟膏	アレゲンを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。				頻度不明(過 敏症)							通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	尋麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ
	抗 ヒスタミン	ドーマレイン 酸クロルフェ ニラミン	外用の添付 文書なし												
鎮 痒 成分	クロタミン	オイラックス	本剤は抗ヒス タミン作用を 示さないこと 、またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を与 えないことな どから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤と は作用機序 を異にすると 考えられる。 一般には、皮 膚に軽しやく 熱感を与 え、温覚に対 するこの刺激 が競合的に そう痒感を消 失させるとい われている。				0.1~5%未満 (熱感・しやく 熱感、刺激症 状(ピリピリ 感、ひりひり 感等)、発 赤、発赤増 強・紅斑増 悪、分泌物増 加、漫漶傾 向)	5%以上(過敏 症)						通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊婦の 可能性のある婦人：大量 かつ広範囲の使用は避け る。	湿疹、尋麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス
局 所 刺 激 成分	アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル「丸 石」(内用・ 外用)	胃粘膜の知 覚神経末端 を麻痺させ、 中枢への刺 激伝達を遮 断して疼痛、 嘔吐を鎮め る。				0.1~5%(食 欲不振、悪 心、口渇、便 秘)、0.1%未 満(下痢、メ ドヘモグロビ ン血症(小 児))	頻度不明(過 敏症)						(内用) 1日0.6~1g、3回分服。適 宜増減。高齢者は減量 (外用) 通常、5~15%の軟膏剤、 液剤、散布剤として、また は、1個中200mg~300mg を含有する坐剤として適宜 患部に使用する	(内用) 下記疾患に伴 う疼痛・嘔吐： 胃炎、胃潰瘍 (外用) 下記疾患にお ける鎮痛・鎮 痒：外傷、熱 傷、日焼け、皮 膚潰瘍、掻痒 症、痔疾

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化				
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 り過ぎ使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
局所 麻酔 成分	塩酸ジブカイ ン ベルカミン 注、表面麻 酔類似と考 え使用	感覚・求心神 経繊維のNa ⁺ チャネルを遮 断すること により局所麻酔 作用を発現す る。効力、持 続性、毒性い ずれも最大級 の局所麻酔 薬であるが、 より効力を強 めるために局 所鎮痛以外の 目的にはエ ピネフリンを 添加して用い る		痙攣、痙攣等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眼 気、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐等)	頻度不明(過 敏症)	本剤に対し過敏症 の既往歴							使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 仙骨麻酔:0.05~0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものをを用い、通常成人 10~30mgを使用する。 伝達麻酔(基準量高用量: 1回40mg):0.05~0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものをを用い、通常成人 3~40mgを使用する。 浸潤麻酔(基準量高用量: 1回40mg):0.05~0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものをを用い、通常成人 1~40mgを使用する。 表面麻酔・耳鼻咽喉科領 域の粘膜麻酔には、1~ 2%液にエピネフリンを添 加したものをを用い、噴霧ま たは塗布する。眼科領域 の麻酔には、0.05~0.1% 液にエピネフリンを添加し たものをを用い、通常成人に は1~5滴を点眼する。・ 尿道粘膜麻酔には、0.1% 液にエピネフリンを添加し たものをを用い、通常成人 男子10~20mg、女子3~ 7mgを使用する。・膀胱粘 膜麻酔には、0.025~ 0.05%液にエピネフリンを 添加したものをを用い、通常 成人10~20mgを使用す る。・局所鎮痛には、0.025 ~0.05%液を用い、適量 を使用する。 歯科領域麻酔:0.1%注射 液にエピネフリンを添加し たものをを用い、伝達麻酔・ 浸潤麻酔には通常成人1 ~2mgを使用する。	仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔、浸潤麻 酔

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo. 37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づ く習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化		
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用に よる重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの									
局所 麻酔 成分	リドカイン	キシロカイン液「4%」:塩酸リドカイン表面麻酔に類似のため使用	神経膜のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。	意識障害、痙攣、虚脱(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴。	高齢者又は全身状態が不良、心刺激伝導障害、重症の肝機能障害又は腎機能障害、幼児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。		過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。 ・眼科・点眼/用として使用しないこと。注射用として使用しない。		塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。 幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。	表面麻酔	
抗 炎 症 成 分	グリチルレチン酸	デルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造が、ハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。				5%以上又は頻度不明(過敏症)					眼科用として使用しない		通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎	
抗 炎 症 成 分	サリチル酸メチル	サリチル酸メチル「ミヤザワ」				大量使用:頭痛、悪心・嘔吐、食欲不振、頻脈	過敏症		本剤に対し過敏症の既往歴			大量使用による頭痛、悪心・嘔吐、食欲不振、頻脈		5%又はそれ以上の濃度の液剤、軟膏剤又はリニメント剤として皮膚局所に塗布する	下配における鎮痛・消炎、関節痛、筋肉痛、打撲、捻挫	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
殺菌成分	イソプロピル メチルフェ ノール	フェノールを 使用	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。				顕度不明(過 敏症)		・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中 毒症状発現)			・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・服に入らないよ うに注意すること。 ・本剤は必ず希 釈し、濃度に注 意して使用する こと。 ・炎症または易 刺激性の部位に 使用する場合は 、濃度に注意 して正常の部位 に使用するよりも 低濃度とすること が望ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包帯、ギプ ス包帯、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそれ があるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。〔吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。〕 ・顔紋を避けるた め、保管及び取 扱いは十分注 意すること。	長期間に使 用しないこ と。(吸収さ れ、中毒症状 の発現のお それ。)	効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~87倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)		

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応薬品	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	用法用量	効能効果	
殺菌成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として5%ヒビテン液				ショック(0.1%未満)		0.1%未満(過敏症)		・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、腎臓、耳(内耳、中耳、外耳)、聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。 ・腫、膀胱、口腔等の粘膜面：ショック症状の発現が報告されている。 ・産婦人科用(腫、外陰部の消毒等)、泌尿器科用、膀胱・外性器の消毒等には使用しない。 ・眼					・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。			本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)(通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(0.5%エタノール溶液) ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液) ④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上) ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液)	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症例の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
局 所 刺 激 成 分	アンモニア	アンモニア 水「エビス」					頻度不明(局 所刺激、発 赤、灼熱感)	頻度不明(過 敏症)					眼又は眼の 周囲に使用 しない	希釈して使用 眼に入らないよう にする 原液または濃厚 液の蒸気を吸入 すると、呼吸器 等の粘膜を刺激 し、喉頭収れん、 肺・気管支に障 害を起こすことが ある	刺激作用を 有するので、 長期間または 同一部位 に反復使用 しない 湿布等による 長期間にあ たる皮膚との 接触を避ける		②2~10倍に希釈し、塗布 する。	①経口 皮アンモニア・ ウイキョウ精の 調剤原料に用 いる。 ②外用 虫さされ
清 涼 化 成 分	カンフル	カンフル精	局所刺激作 用を有し、皮 膚に塗布する と発赤又は冷 感を生じる				頻度不明(過 敏症)						湿潤面へは使用 しない 眼又は眼の周囲 には使用しない				患部に適量を塗布あるい は塗擦する。	下記疾患にお ける局所刺 激、血行の改 善、消炎、鎮 痛、鎮痒 筋肉痛、挫傷、 打撲(第1度)、凍 瘡、皮膚そう痒 症
	メントール	日本薬局方 一メントール 「ミヤザワ」																芳香・矯臭・矯 味の目的で調 剤に用いる